

説教『主は打ち砕かれた心に近くなります』

小河信一 牧師

詩編34編 1節～23節

前回の詩編の講解説教では、詩編23編を取り上げました。

文字通り、「私の羊飼い」に導かれて、その詩編の初めから終わりまでを、流れそに沿って読みました。最後には、主の家に帰るように導かれました。

私流に、詩編の詩句を抜き出したり、後の詩行から前の詩行に 遡さかのぼって黙想したり、詩編の読み方は、人により時により、自由自在と言えましょう。しかしながら、一つの詩編を読み祈る時の基本は、詩人が初めから終わりまで、聖霊の導きによって詩編をうたい上げた、その流れに沿うことです。

多くの信仰者がすでに知っているように、詩編にそのまま私たちの身と魂をゆだねることは、何よりの信仰生活の養うるおいまたは潤いとなります。霊的な言葉の流れは、私たちの乱れた気持ちおが平安になるよう整えますし、また、荒ぶるこの世の悪と戦う力や知恵を私たちに与えてくれます。

それでは、小川か、はたまた、大河か、あるいは、清流か、はたまた、激流か、所々、人によって感じ方は様々でしょうが、詩編34編を初めから終わりまで、素直に読んでいきましょう。とりわけ、この詩編は、「アルファベットによる詩」ですから、間違いなくA(ヘブライ語の文字で:a アレフ)からZ(同上:t タヴ)まで貫かれ、終わりへと至ります。

詩編の本文ではなく、表題(詩編 34:1)の中ですが、恥も外聞もなく、人前で「狂気の人を装よそおい」という尋常でない状況が提示されています(参照:サムエル記上 21:11-16)。ここでは、詩人が人生のどん底にあり、人間関係の破れを背負い、心がかき乱されていたということを受け止めておきたいと思います。

表題が孕む不穏な空気ほらに、後ろ髪が引かれそうになる……それはまた思い煩わずらうことの多い日常生活のありのままの姿ですが……、そうであればこそ、詩編の幕開きに集中しましょう。本来、詩編が持っている滑らかな流れなめの力(展開力)は、私たちの「自分が…自分が…」という固執を打ち砕くことでしょう。

詩編 34:2-4——

2 どのようなときも、わたしは主をたたえ

わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。

3 わたしの魂は主を賛美する。

貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。

4 わたしと共に主をたたえよ(大きくしよう)。

ひとつになって御名をあがめよう(高めよう)。

礼拝者の呼吸を整えるかのような、心地よい流れに気づかれたでしょうか。

一口で言えば、ここには、賛美の正しい流れ(:2→:3→:4)があります。

:2 では、主なる神が「わたし」を招き、礼拝の開始することが告げられています。主の前に、「わたし」が立つことが、出発点です。主なる神は、あなたが立ち上がり、賛美するのを待っておられます。

:3 では、「わたし」は誰と共に礼拝するのか、明らかにされています。すべての人と共に、が正答でしょうが、ここに挙げられているのは、「貧しい人々」(原文・複数形)です。それは、私たちが主イエス・キリストを拝むという点で、まさに心に刻むべきことでした。

マタイ福音書 5:3 山上の説教 八福の中の第一番目——

心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

すべての人を救いに招かれる主イエスは、第一に「心の貧しい人々」に向かって語りかけられました。「心の貧しい人々は」との主イエスの語り出しは、詩編の「貧しい人よ」との呼びかけと調和して、主イエスの祝福の大きさと憐れみ深さを言い表しています。

「わたし」自身もまた、礼拝に招かれた「心の貧しい人」として、謙遜にされたところで、次節に向かいます。

:4 では、「わたしと共に」と「ひとつになって」とが反復されています。「わたし」一人ひとりが「わたしたち」になるのです。ひょっとしたら、「わたし」と「あなた」が一つになれない「わたし」の側の言い分・言い訳があるかもしれません。

その「わたし」のわだかまりを溶かすのが、「主を大きくする」ことであり、「御名を高める」ことです。ただ主なる神が大きく、高くなります——唯一、その力が礼拝において、私たちを結び付ける

のです。人の子となって地に降られた御子、イエス・キリストは私たちに、神の愛の大きさや高さを教えてくださいました(エフェソ 3:18)。

ここに、神への、私一人の賛美が、私たちの賛美へと至りました。神が私たちに、賛美という献げものを抱(いだ)かせて、私たちを礼拝に招く、それが神の御心であったのです。

賛美への誘^{いざな}いの後、私たちの礼拝の中心である主イエス・キリストの救いを、力強く指し示して(詩編 34:5 他に「救い出す」の類句 :7,8,19,20)から、次のようにうたっています。

詩編 34:6——

主を仰ぎ見る人は光と輝き
辱めに顔を伏せることはない。

主イエス・キリストの十字架と復活によって、神の大きさと高さ、神の義と愛を知らされた私たちは、「主を仰ぎ見る」恵みにあずかりました。そして、私たちは神の栄光を反映する 僕^{しもべ}として、「光と輝き」、「光の子」(ヨハネ 12:36、エフェソ 5:8)となったのです。

その光は、詩人が顧みているように、災いや苦難(詩編 34:7,18,20,22)という闇の中で輝いているものです。この世の闇が深ければ深いほど、主にある「光の子」の働きが求められます。

それは、賛美が告白へと変わる時と言えるでしょう。

賛美の心にあふれる信仰者が、この世に向かって、隣人に対して、口で「主は私を苦難から救い出してくださいました」(詩編 34:7)と公に言い表します(ローマ 10:9-10)。「光の子」の顔の輝きは、このような明確な信仰告白によって、隣人の罪の闇の中へと射し込んでゆきます。

この詩編の中央部には、私たちの礼拝の中心を告知するにふさわしい詩行があります。

詩編 34:9——

味わい、見よ、主の恵み深さを。
いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。

私たちの礼拝の中心には、説教と主の聖餐があります。

主の聖餐の恵みは測り知れませんが、私たちは、主の聖餐を思い起こしつつ、神の御言葉を「分かる」(悟る)と同時に「味わう」ように導かれます。

私たちは、聖なる霊の糧に、すなわち、主の分かち与えられるパンと杯にあずかります。主イエス・キリストが、私たちの人生と日常をがんじがらめにしている罪の縄目から解放してくださいました

からです。そして、私たちは罪を脱ぎ捨て、「生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求め」、「主が恵み深い方だ」と味わうこと(I ペトロ 2:1-3)がゆるされました。

私たちは一度、洗礼の恵みを受けて、全く救われて、神の目から見て、十分なものとされました。しかし、私たちは、この十分さ(聖さ)を保ち続けるために、霊の乳を飲み、説教と主の聖餐を味わわなければなりません。そして、私たちに与えられた上よりの救いの確かさを想起し続け、感謝するのが、信仰者の道です。

さて、この詩編の流れは、終わりに向かうと共に、最高潮へと至ります。

しかし、それは、詩編34編の賛美が次第に高まっているとか、あるいは、詩句の洗練してきているとか、などの観点から、「最高潮」と言っているわけではありません。

聖書は、常に、直接的にであれ、また間接的にであれ、「主イエス・キリストの救い」をあらわしているものとして読むべきものです。従って、この詩編を終わりまで読み通す時にも、「主イエス・キリストの救い」を賛美し告白する者として、御言葉に耳を傾けることが大切です。

さあ、主の前に「打ち砕かれた心」・「悔いる霊」(詩編 34:19)をもって、詩編 34:21-23 を読みましょう。

21 骨の一本も損なわれることのないように
彼を守ってください。

22 主に逆らう者は災いに遭えば命を失い
主に従う人を憎む者は罪に定められる。

23 主はその僕の魂を贖ってください。

主を避けどころとする人は
罪に定められることがない。

ここで、私たちは、「主を仰ぎ見る」(詩編 34:6)とは、十字架につけられた主イエス・キリストを仰ぎ見ることでであると教えられます。

ヨハネ福音書 19:31-36——

31 その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。

32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男と

の足を折った(まだ死んでいなかったから)。33 イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので、その足は折らなかった。34 しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出した。35 それを目撃した者が証しており、その証しは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。36 これらのことが起こったのは、「その骨は一つも砕かれない」(詩編 34:21 の引用。他に民数記 9:12 過越祭の掟)という聖書の言葉が実現するためであった。

主イエス・キリストの十字架の出来事において、旧約聖書の言葉が一つ一つ実現していきました。それは、神の大いなる救いの計画が、御子によって成就されたことを、私たちに告知らせています。

罪人を救い出す苦難の中に、希望の光がともされているかのごとく、主イエスの身体は「骨の一本も損なわれること」がありませんでした。主の十字架は、父なる神が一時的に御子を見捨てられた出来事ではなく、父なる神が絶えず御子を見守り続けていた出来事だったのです。

詩編の結末において、私たちがただひたすら、主イエス・キリストの救いに依り頼むことへと指針として、「主に逆らう者」の道と「主に従う人」の道が開示されます。

一方、神に逆らい、隣人である「主に従う人」を憎む者は「罪に定められます」。他方、主を避けどころとする人、つまり、主の前に悔い改める人は「罪に定められることはありません」。

十字架と復活との福音を信じて、イエス・キリストに結ばれた人は幸いです。

その人は、無償の罪の赦しの中に置かれています。

その人は、罪に染まり、罪に引かれ続けていましたが、神の救いの力がそれに打ち勝ちました。罪の縄目を解き放ちました。だから、「罪に定められることはありません」。

詩編の最後に、私たち罪人のために、キリストが成し遂げてくださった執り成しの業が(厳密に言えば預言として)明らかにされました。この詩編34編という小さな聖書を読み終えた私たちの心には、主の恵みと平安があふれ出します。

私たちは折々に、詩編を読み直し、十字架の主を仰ぎ見、この世にあって光と輝いて、信仰者の道を歩んでゆきたいと願います。